

	<h1>ふくりゅう</h1>	<b>特定非営利活動法人 日本下水文化研究会会報</b>
		発行責任者 稲場紀久雄(運営委員会代表)
		編集担当 酒井彰(事務局長)
		令和2年7月23日 通巻100号

## ふくりゅう 100号 目次

法人化 20 周年記念誌ならびに「ふくりゅう」100 号の発刊にあたり	酒井 彰	1
2020 バルトン忌案内		2
第 24 回総会議事内容ならびにシンポジウム報告		4
急告！新型コロナウイルス情報サイト／記念誌の実費頒布		6
運営委員会から／編集後記		6

## 法人化 20 周年記念誌ならびに「ふくりゅう」100 号の発刊にあたり

本会事務局長・「ふくりゅう」編集担当 酒井 彰

7月10日、今年度総会開催当日、「法人化20周年記念誌」を刊行することができました。また、今号の「ふくりゅう」は、1995年に本会の会報として創刊号が発行されてから、ちょうど100号にあたります。同じ月にエポックメイキングなことが起きました。重なったことは偶然に過ぎませんが、どちらも継続的な活動の積み重ねがあってこそ、刊行あるいは達成できたことであると言えます。

記念誌は、すでに会員の皆様のもとに届いているものと思います。発刊の辞にも書かせていただいておりますが、ご一読いただき、ご参加された活動などを思い出していただくとともに、本会の活動のベースにある志しを今一度汲み取っていただけたら幸いです。ご感想をぜひお寄せください。

「ふくりゅう」は、創刊当時、会員の小松建司氏の発案を運営委員であった栗田彰氏が、運営委員会で提案され、発刊の運びとなりました。それ以来20号(2000年11月発行)まで、小松氏に編集の労を取っていただきました。改めて、創刊にご尽力された方々に感謝申し上げます。

「ふくりゅう」の名がついたのは第3号からです。本会の活動もあるときは表面に出て、ある時は静かに潜行して活動を続ける、との思いが込められています。

私は、21号から編集に携わり、今号に至っております。創刊より、足掛け26年、お

およそ3か月に1回のペースで発行を続けてきたことになります。NPO法人が会報を継続的に発行できるということは、何と言いましても継続的活動があったからこそこのことです。

創刊号で、稲場代表は、会報は研究会の運営をオープンにし、自由な発言や討論の場を提供し、「会員みんなの研究会」とするためのツールであり、活動を継続する基盤であると創刊の意義を述べられています。また、西堀清六代表評議員は、各自ひとり一人が知り得た情報を速やかに周りの人に伝え効果的に活用していく意味をもつ「知る努力、知らせる努力」という標語を体現するのが会報の目的であり、会報の継続的発行は活動範囲を広げ、成長の糧となるものだと述べています。

編集の方針として、イベント等の予定を周知するこ

日本下水文化研究会報

---

# 日本下水文化研究会 会報

発行所 日本下水文化研究会運営委員会  
発行責任者 谷口尚弘(運営委員会副代表)  
発行年月日 平成7年6月1日  
印刷所 (株)愛甲社  
編集 小松建司 新澤紀昭  
第1号(通巻1号)

発刊の辞・会員みんなの研究会  
運営委員代表 稲場 紀久雄

2月16日のことである。今年最初の運営委員会の席上、栗田委員がこう切り出した。  
「今年は会報を出すことにしませんか。私の友人が二人自分たちが手伝うから会報を出しては、と勧めてくれるんです。どうですか、この際踏み切っては・・・」  
私は、信じられない思いとワクワクする気持ちでその提案を聞いていた。定期的に会報を出すためには、

会報の創刊にあたって  
代表評議員 西堀 清六

月日の流れは速いもので、阪神大震災からはや数カ月が過ぎようとしています。しかし、被災地では復興・復旧への努力が注がれていますが、いまだ当面の生活に追われている方も多く聞いています。被災者の皆様のご健勝をお祈り申し上げます。  
さて、日本下水文化研究会は、その母体である「日本下水文化研究会」が昭和61年12月に設立されて以来、はや9年目に入っています。この間、(社)日本下水道協

会報 創刊号 トップページ

とはもちろんですが、その結果を速やかに会員へフィードバックすることに務めてきました。これは、会報の目的が西堀氏の言われる「知る努力、知らせる努力」であったからです。「ふくりゅう」を通じて、会員の皆様に本会の活動を速やかに、広く伝えるという役割を果たすことができたと思っています。

本会の継続的活動が、「ふくりゅう」の継続的発行に必要なことであったと同時に、「ふくりゅう」の継続的発行も本会の活動に寄与したのであり、編集を担ったものとして喜びに堪えません。

「みんなの研究会」とは、多少ニュアンスが異なるかと思いますが、イベントの結果をお伝えするにあたり、主催者側（つまり本会）による記事だけでなく、活動に参加された方に参加記のかたちで寄稿をお願いして、イベントの雰囲気や感じたことを伝えてもらうようにしてきました。これは、きちんとした講演録を掲載している機関誌「下水文化研究」との棲み分けを意識していることです。結果として、多くの方に執筆していただき、多くの声を集めることにつながったと思います。また、「会員みんなの研究会」となるよう、寄稿の依頼だけではなく、特定のテーマに対して一緒にやりませんかといった呼びかけもしたことがありますが、残念ながら期待した反応が得られなかったこともありました。

本会のイベント参加者に若い人が少ないなか、海外技術協力事業の活動サイトを視察するスタディーツアー参加者やインターンとして活動サイトで調査研究活動をされた若い方々の声も掲載してきました。

## 新型コロナ禍の中ですが バルトン忌に参加してみませんか！

恒例のバルトン忌を下記により開催します。バルトン先生は、わが国の「衛生工学の祖」です。明治時代の代表的感染症は、コレラです。先生は、コレラを退治するためわが国に近代的水道技術を伝えました。

バルトン忌は、わが国がコレラという感染症に苦しんだ時代、いわば原点に戻ってわが国の下水文化のあり方を考えるため、本会が1992年に始めました。今回は29回目ですが、感染症流行下のバルトン忌は今回が初めてです。

新型コロナとコレラでは、感染の仕組みや症状などは全く違います。しかし、感染症対策を歴史的に考える良い機会となるでしょう。なお、ご参加下さる方は、マスク着用をお願い致します。

今回は、台湾の謝長廷大使(台北駐日経済文化代表処)が参加されます。台北市は、今年75年振りに自來水博

運営委員の面々の執筆による連載記事も長く掲載いたしました。具体的な執筆者、タイトルは記念誌に譲りますが、会報の楽しみのひとつにされていた方もおられるのではないかと思います。

記念誌発刊の辞でも述べましたが、法人化20周年はこれからも続く道りにおける一つの節目と考えています。健全な水循環の再生、新型コロナウイルス禍で明らかになった世界的な公衆衛生の課題などが顕在化しました。しかし、解決の方向には向かっているとは思えません。本会運営委員会は、昨年度、改革に向け新たな一歩を踏み出しました。今年度の総会では、不退職の決意で本格的改組に臨むことを議決しました。

「ふくりゅう」の命運はその動向次第といっても過言ではありませんが、発刊にあたって西堀氏、稲場代表が述べられた会報の目的に沿って、運営委員会と会員各位との議論の橋渡しの機能をはたして行くことが求められると思います。

なお、「ふくりゅう」のバックナンバーは第1号からすべて本会ホームページから読むことができます。ただし、いくつかの号では、ファイルが壊れているようです。早急に修復する必要性を感じております。お気づきの点をお知らせいただければ幸いです。

最後になりましたが、この20年間運営委員会代表の重責を務めることができ、「ふくりゅう」の編集を続けることができましたのも会員各位が積極的に活動に関与していただいたこと、さまざまなかたちで運営にご協力いただいた賜物と心より感謝申し上げます。

物館構内にバルトン先生の胸像を再建します。そこで、謝大使は、「日本のバルトン忌に是非参列したい」と希望されたのです。

今年のバルトン忌は、青山霊園の墓碑の参拝の後、台湾大使館(白金台)の台北駐日経済文化代表処会議室を特別にお借りし、謝大使に胸像再建祝賀のお祝いの目録を贈呈した後、記念講演会を開催します。記念講演では、バルトン先生を巡る様々なエピソードが披露されます。新型コロナ禍の中ですが、ご関心のある方はご参加下さい。

記

日時：8月5日(水)

[午前の部] 11:00~11:30 墓参

集合場所：青山霊園・バルトン先生の墓碑前

[墓碑の位置：一種イ第11号11側]

※ 分からない方は、島村花店前までお越し下さい。墓碑までご案内します。（墓碑及び島村花店への行き方は案内図参照）

プログラム：①挨拶、②鳥海女史(曾孫)メッセージ朗読、③謝大使スピーチ、④献花、⑤記念写真撮影

[午後の部] 14:30~16:45

会場：台北駐日経済文化代表処の会議室  
(港区白金台5-20-2：案内図参照)

プログラム：  
①開会挨拶、②お祝い目録の贈呈式  
③謝大使ご挨拶

④記念講演(1)稲場紀久雄：  
「女傑・叔母メアリーとバルトン先生」

⑤記念講演(2)田中喜芳：  
「3人のバルトン、2人の Doyle」

[講演者：田中喜芳先生プロフィール]  
シャーロック・ホームズ、アーサー・コナン・ドイル、ビクトリア朝研究家。人間行動学博士 (PhD)。世界的に権威あるホームズ研究団体 BSI 会員 (二人目の日本人会員)。日本シャーロック・ホームズ会その他各国 34 団体の会員・名誉会員。著書多数。

＜墓参集合及び講演会会場案内図＞

青山霊園 島村花店

東京都港区南青山 2-34-31

(☎ 03-3401-2682)

東京メトロ

千代田線乃木坂駅 徒歩 5 分、

銀座線外苑前駅 徒歩 10 分

バルトン墓碑  
一種イ第 11 号 11 側

- ※ 今年は新型コロナウイルス禍、島村花店の待合室を利用できません。
- ※ コロナ対策だけでなく、熱中症対策も各自でお願いいたします。



台北駐日経済文化代表処

東京都港区白金台 5-20-2

東京メトロ南北線・都営地下鉄三田線

白金台駅 徒歩 5 分、JR・東急目黒駅

徒歩 12 分

お問い合わせ:本会運営委員会まで

(jade.jca.apc.org)

当日担当者携帯番号 090-7416-6354

090-2304-7200



## 日本下水文化研究会 第24回総会報告

### I. 総会議事概要 —2020年度抜本改組の方針を決議—

去る7月10日(金)13:30~17:00、全水道会館会議室にて、日本下水文化研究会 第24回総会が開催されました。コロナ禍の渦中、そして鬱陶しい梅雨空のもと、賛助会員3社(日水コン、日之出水道、小松電機産業)を含め24名の参加を得ました。いつもの小さい会議室ではなかったので、ディスタンスは十分とることができました。シンポジウムそして総会審議は、予定時刻を超える熱気に包まれたものとなりました。当日の参加者には「NPO法人化20周年記念誌」を配布いたしました。

#### 1. 代表開会挨拶

稲場紀久雄代表より概略次の開会挨拶あり。

本年度は、本会が「日本水循環・下水文化研究協会(仮称)」(以下「水循環協」)に移行し、併せて会員拡充を実現し、事業内容の充実と財政基盤の安定を期する、いわば本会の存廃が懸った年である。このため、運営委員会は、総力を挙げて法人形態の研究、定款の改定、水循環協発起人会の設置と運営、会員拡充活動など諸準備を進める。会員各位のご協力を賜わりたい。

#### 2. 総会第1部:シンポジウム「下水文化の歩み—これまでとこれから—」(詳しくは後出)

#### 3. 第24回総会議事概要

- (1) 定足数の確認:正会員数98名中、出席者11名、委任状提出者41名、合計52名、定款第27条により本総会は成立した(会員数の3分の1以上)。
- (2) 議長選出:定款第26条により本日の出席会員から議長を選出、運営委員である鈴木薫氏が選出された。
- (3) 書記指名:本総会の書記に運営委員の中西正弘氏および高橋邦夫氏を指名、これを承認した。
- (4) 議事録署名人選任:議長より本日の議事録をまとめるにあたり、議事録署名人2名を選任することを諮り、稲場紀久雄氏、酒井彰氏2名を選任し承認された。

#### (5) 議事:

第1号議案 2019年度事業報告の承認並びに会員の現況報告に関する件、報告:名誉会員の現況及び名誉会員称号授与規定

第2号議案 2019年度収入支出状況報告及び会計監査の承認に関する件

第3号議案 財産目録の承認に関する件

第4号議案 定款の改正に関する件

第5号議案 2020年度事業計画及び予算に関する件

第6号議案 日本文化研究会の改組に関する件

(6) 議事の結果:

① 第1号議案:2019年度事業報告の承認並びに会員の現況報告に関する件

酒井事務局長より、2019年度事業報告、会員の現況報告(正会員98名、賛助会員11社)ならびに、があり、承認された。また、名誉会員の現況及び名誉会員称号授与規定について報告がなされた。

② 第2号議案 2019年度収入支出状況報告及び会計監査の承認に関する件

渡辺副代表より2019年度収入支出状況について、谷口監事より同会計監査について報告があった。

③ 第3号議案 財産目録の承認に関する件

渡辺副代表より、2019年度の財産目録について報告された。

第2号議案、第3号議案につき、正味財産額に疑義が生じ、収入支出、財産目録の修正、及び会計監査の修正が求められた。なお、修正は、早急に会報に掲載し、会員に周知することを条件に承認された。

④ 第4号議案 定款の改正に関する件

酒井事務局長より、事務所移転に伴う定款の改正が報告され、承認された。

⑤ 第5号議案 2020年度事業計画及び予算に関する件

酒井事務局長より、2020年度事業計画及び予算について説明があり、計画等については承認された。また予算に関しては、収入の部に会員からの寄付項目を加えるべきとの意見があり、項目建てを修正することで承認を得た。

⑥ 第6号議案 日本文化研究会の改組に関する件

稲場代表から開会挨拶にも述べられたように、本会が「水循環協」に移行し、併せて会員拡充を実現し、事業内容の充実と財政基盤の安定を期する、いわば本会の存廃が懸った年である旨、それに向けての行動、活動方針を説明し、承認された。

(以上)

## II. シンポジウム「下水文化の歩み—これまでとこれから—」

シンポジウムは、7月10日付で発刊された「NPO 法人化 20周年記念誌」をもとに、創設から現在までを振り返り、これからの進むべき道を考えるという趣旨で行われました。

コーディネータは野村喜一氏（日水コン会長）にご依頼し、パネリストは代表：稲場紀久雄氏、事務局長：酒井彰氏、名誉会員：谷口尚弘氏、会員：藤木修氏（京都大学教授）、副代表：渡辺勝久氏。

まず、コーディネータ野村氏は、これまでの歩み、そしてこれからの進むべき方向という2つの側面から各パネラーの発言を求めました。

野村氏は、これまでの歩みを総括した後、自ら用意された「生活圏（文化圏）から見た水循環の考え方—水循環における下水文化の位置づけ—」をもとに水循環にかかわるご自身の考え方を述べました。以下、各パネラーの発言の趣旨を要約するとともに、野村氏の発言の要旨を紹介します。

**稲場** 「下水」の語源は、「ケ（穢）」である下水の「ハレ（晴れ）=清浄」に向けた再生を含意している。この認識のもとで、日本の下水文化は歴史的に3段階（～江戸期末、～近代日本、～そして今、これから）からなる進化の経過をたどってきた。こうした進化過程を俯瞰したうえで、「今、健全な水循環の構築を目指した抜本的な改革が求められている」と強調した。

**酒井** 法人化の際、稲場氏から代表として運営を引き継ぎ、現在まで活動を継続してきた。また初めて手掛けた海外活動が現在まで長期にわたり継続できた。一方で、近年会員減少など衰退傾向は否めず、また関連団体などに対するネットワーク化も不十分であった。しかしながら、今後とも情報発信、アーカイブ化

の充実などが必要である。今後、健全な水循環の構築を目指す意義は大きいですが、それは、これから変化していく社会の在り様とも不可分に関わる。水循環を基軸とした改組に向けて、理念をベースにしたうえで、研究体制、組織体制の充実に具体的に着手しなければならないと考えている。

**谷口** 近代化に伴い、都市への急激な人口移動集中、核家族化の進行、女性の経済的自立などが日本の水文化を変えた。さらに、水道、下水道の整備普及は、水を大事にし、水を介したコミュニティの連帯を希薄にさせ、使う文化、捨てる文化を招いた。これから求められる文化は、コミュニティと水文化の視点から、水循環を介した、都市と地方の連帯の再構築と考えている。

**藤木** これまで、一会員として情報を得る立場にあったが、様々な時代背景における下水文化の形態、また海外活動などに関心をもってきた。一方で建設省の役人として振り返ると、流域下水道事業の推進・反対の渦中を体験し、その対策に終始してきた感がある。多くの市民にとって水循環が見えないと指摘されているが、市民やステークホルダーからなるプラットフォームが必要である。具体的には都市水路研究会の設立し、身近な水路をフィールドとして水循環が見えるようにする活動は意味のあることであった。また流域下水道事業に関してその文化的背景や意思決定プロセスなどを含めた現時点での総括も必要と感じている。

**渡辺** これまで、流域別総合下水道計画などに関して河川部局との不調和などを体験して来た。そして水循環基本法施行後、その運用を有意義なものにするため、活動してきた。特に市民への情報提供、PRなどは重要である。そして、これから、上下流問題、水源と都市水供給など、多摩川を対象に適正な水循環モデル「春の小川」の構築、そして共有財としての地下水問題など、（JR東海のリニア計画の政治的利用）に取り組まなければならないと考えている。

**野村** 水循環には様々なタイプが存在する。現在、認定されている流域水循環計画（とやま21世紀ビジョン、鳴瀬川流域水循環計画、水とみどりの基本計画（品川区）を例示）は河川流域を単位としたものである。一方、東京における水循環圏（「都民から見た水循環圏」の例示）は、住民の生活圏から見て、住民には流域の概念は希薄ではないだろうか。江戸期、消費都市江戸の生活用水は神田川に依存し



パネルディスカッション「下水文化の歩み」

た。次いで、玉川上水の建設に多摩川流域へと拡大した。そして戦後の高度経済成長期、東京は荒川を経て利根川流域へと圏域を拡大し、今や、原材料、食品の輸入は世界の水資源を巻き込んだ経済圏域を構成す

るに至っている。

水道と下水道のある生活圏（文化圏）に住む住民が認識する水循環圏であるという言及そして提言である。

（高橋邦夫 記）

## 急 告！

### (1) 新型コロナウイルス情報サイト

7月22日朝日新聞の「声」欄に「この機に水質改善して『遺産』に」という投書が掲載されました。トライアスロンの会場となるお台場海浜公園の水質を徹底改善せよという提案です。新型コロナウイルスが存在する汚水が無処理で放流される合流式下水道越流水の水質問題への関心が高まっている今こそ、根本的な解決を考える絶好機です。

会員の皆様にはメールでお知らせしていますが、ふくりゅう 99号で稲場代表執筆の論考「新型コロナウイルスと下水文化」を読まれた会員の福田寛允氏が、収集された情

報を「新型コロナウイルスと下水道に関する情報収集」としてまとめられ、5月11日より、本会のホームページ上で公開していただいております。度重なる更新の結果、最新情報を含め、新型コロナウイルスに関する情報が集大成されているといってもいいかと思えます。皆さんもぜひ訪問して、疑問に思っていることの解決に役立ててください。そしてできたら、情報提供者として参加してください。

遅まきながら、この場を借りて、福田氏の労作に敬意を表するとともに情報共有に感謝申し上げます。

### (2) 記念誌残部あります

「NPO 法人化 20周年記念誌」は、残部がございます。御寄稿いただいた方には、お約束通りご希望部数をお送りすることとしております。皆様も、会員だったあの方も読

みたいに違いないといった方がいらっしゃいましたら、実費購入（2,000円、送料会負担）のうえ、お渡しいたきますようお願いいたします。残部には限りがありますので、お申し込みはお早めに。

## 運営委員会より

- ① 記事にもありますように、今年度の総会は終了いたしました。運営委員会は、改組に向けた活動に取り組んでいく所存ですので、会員各位には何卒ご理解とご協力のほどお願い申し上げます。
- ② 決算、会計監査につきましては、早急に訂正のうえ、会員各位へお伝えするよういたします。総会では、総会後の「ふくりゅう」に掲載する旨、回答いたしました。

叶いませんでしたことお詫び申し上げます。

- ③ 今年度会費請求におきまして、会費を納められている会員の方にも過年度会費をご請求してしまうということがございました。誤ってご請求してしまいました会員の方々には心より深謝申し上げます。このようなことが再び起こらないよう、事務局業務において、チェック機能が十分果たせるよう対処してまいります。

## 編集後記

100号でありながら記念号のスタイルにできませんでした。記念誌の最終校正、総会準備など重なり、記念誌編集がこれまでを振り返る機会となり、会報でも何か企画する余力がなかったというのが正直なところです。創刊号を読み返し、会報に込められた思いや意義を新たにすることができましたし、ホームページ上でいくつかのバックナンバーについて見入ってしまうこともありました ▶ 会員の皆さん

からから、「思い出のふくりゅう記事」といったことをお寄せいただけたら、順次ご紹介していきたいと思えます。もし、たくさんお寄せいただけたら、特集も組みたいと思えます。記念誌のご感想とともに、会員の声をたくさん集め、「会員みんなの会報」に再び近付けられたらと思えます。

（酒井 彰）

特定非営利活動法人 日本下水文化研究会  
〒101-0027 東京都千代田区神田平河町1番 第3東ビル710号室  
e-mail: jade@jca.apc.org  
URL: <http://www.jca.apc.org/jade/index.htm>  
URL(ブログ): <http://blog.goo.ne.jp/jadetokyo>